



CONDENSED CONJUGATION

NEWS Vol. 29

海外遠征記 ストラスブール編

前田 大光博士(立命館大)
鈴木 修一博士(大阪大)

——前回のマインツ編に続き、海外遠征の2回目です。マインツの後、みなさんはフランスのストラスブールへと移動されたということですが、こちらはどのようなシンポジウムだったのでしょうか？

前田 “Strasbourg-Japan USIAS symposium on Condensed Conjugation”という題目で、2022年9月12日から13日にかけてストラスブール大学で開催されたシンポジウムです。高密度共役第1回国際シンポジウムとして、本領域とUSIAS(ストラスブール大学高等研究所)の共催で行われました。日本側は高密度共役のメンバー11名が研究発表し、ストラスブール大学側からはUSIASを中心に関連分野の研究者10名が発表されました。日本側は久保さんに調整などご準備いただき、現地では Amparo Ruiz Carreteroさんにたいへんお世話いただきました。



講演する関修平・領域代表

鈴木 前田さん、久木一朗さん(大阪大)と私はシャルルドゴール空港から、それぞれ別にTGV(フランスの高速鉄道)で移動してきました。私自身は関空からの直行便でしたが、ロシア上空を飛べなかったのも、アラスカ方面から北極近くを経由し、グリーンランド上空を通ってフランスに着きました。上空からグリーンランドを見られたのは、ちょっと貴重な機会でした。——会場となったストラスブール大学はどのような環境でしょうか？

鈴木 一日目の Institut Charles Sadron はストラスブール中央駅からやや離れた郊外にあり、光をふんだんに取り入れたモダンな建物でした。二日目の Institut de Science et d'Ingenierie Supramoleculaires は街中にありました。ちょうどいい天気だったので、ストラスブール中央駅付近のホテルから30分ほど歩いて、美しい街並みを見ながら会場まで向かいました。——ストラスブール大学といえば、超分子化学の聖地というイメージがあります。

鈴木 二日目の会場の入口にある各階の案内には、ノーベル賞受賞者のLehnやSauvageの名前が並んでおり、さらによく見たらKarplusの名前もあるという……すごいところでした。——さすが名門ですね。講演内容の方はいかがでしたか？

前田 シンポジウムでは、共役系の機能性材料と評価に関して、最新の研究成果を中心に報告されていました。私自身は、そのとき論文投稿中であった荷電 π 電子系の近接積層に起因した電子・光物性の制御(*J. Am. Chem. Soc.* 2022, 144, 21710)



前田 博士



鈴木 博士

に関する話をしてきました。質疑応答でも興味を持っていただいたことがわかり、いい感触を掴みました。また、高密度共役のメンバーの発表を対面の形態で改めて聞く機会でもあり、共同研究のきっかけになる予感もしました。

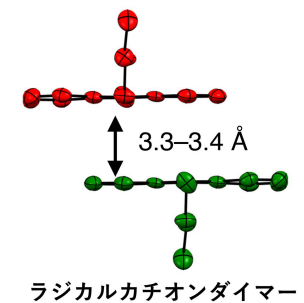
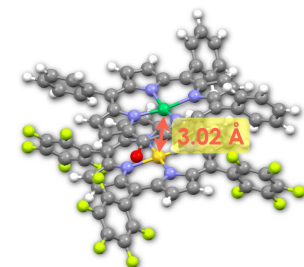
鈴木 新奇な π 電子系の合成から、 π 電子系分子を利用する超分子化学を利用した機能性の追求など、最新の研究成果を聞くことができました。中でも、1日目の Emilie Moulin 先生(Institut Charles Sadron)の講演は、私の研究分野に近いため楽しみにしていました。トリフェニルアミンのラジカルカチオンを利用した超分子化学の研究で、結果やアプローチ方法等に刺激を受けました。私自身の発表はプログラム上で一番最後だったので、ずっと緊張していました。継続して研究している、安定ラジカルカチオンの話をしたのですが、緊張のせいか、自分の発表に関してはあまり覚えていません(笑)。

——講演以外の企画などはあったのでしょうか？

前田 1日目、2日目の終了後には、それぞれの研究所内でラボツアーが設定され、最先端研究の現場に触れることができ、たいへん刺激になりました。

鈴木 私も同行しましたが、ラボツアーは良かったです。実際に装置管理や研究に携わっておられる研究者に説明いただきました。語り口が熱く、私もたいへん刺激になりました。——研究者同士の交流などはありましたでしょうか。

前田 私自身はストラスブールへの訪問は3回目で、一度は招聘教授として滞在したこともあります。なので知り合いも多く、前日の日本チームでの夕食の前に大聖堂の前で待ち合わせして



いる際に、ストラスブール大学の研究者に声をかけられたりしました。他の方からは、「知らない現地の人と気楽に話している」と見られていたようです(笑)。会期中にストラスブール大学の方々とともに再会を楽しんだり、共同研究の打ち合わせもできました。

鈴木 みなさんと一緒に食事をする機会も得られました。二日目の発表のあとの食事では、Thomas Ebbesen 先生(フランス国立科学研究センター)の隣でした。Ebbesen 先生は光物理化学の著名な研究者で、日本のNEC基礎研究所にも長い間在籍しておられた先生です。日本在住時の研究者との交友話や、ディズニーランド、箱根、伊豆など旅行先のお話をたくさん伺いながら、おいしい料理を食べられました。

——出入国などは問題ありませんでしたか？

前田 前回のマインツ編でも出ていましたが、渡航前(8月下旬)に、コロナワクチン接種3回実施済みなら帰国時の72時間前PCR検査が免除となるニュースを聞いて、思わずバンザイした記憶があります。7月の海外渡航時には帰国のことを常に頭において行動していたので、今回もどのタイミングで(シンポジウムを抜けて)PCR検査を受けに行ったらいいだろうかなどと悩んでいましたので。

鈴木 私は久しぶりの海外に加えて、初めてのフランス、初めてのTGVでしたので、移動の際にはかなり緊張しました。ただスマートフォンでいろいろと調べられ、TGVも予約できたので、便利になったものだと感心しました。

——交流が難しい時期が長く続きましたが、ようやく常態に近づいてきた感じですね。

前田 ストラスブールはフランスとドイツの国境沿いの美しい街、アルザス地方にある歴史に翻弄された街で、旧市街が世界遺産となっています。みなさんその雰囲気をリラックスして楽しんでいたようで、たいへん充実したシンポジウムであったと感じています。

——コロナ禍でリモートが発達し、ずいぶん便利になりましたが、やはり対面でしか得られないものも多いということですね。どうもありがとうございました。

もっと詳しく→ <https://x-con.jp/>